

18 世紀の飛騨地域における鉱物資源開発の展開

Mineral Resource Exploitation in Hida Region, Central Japan in the 18th Century

原田 洋一郎¹⁾

Yoichiro Harada¹⁾

要旨：本稿では、18 世紀の飛騨地域における鉱物資源開発がどのように展開したかについて検討した。17 世紀末に幕府料となった飛騨地域では、18 世紀初頭に他地域の鉱山でみられたような、領主の直轄事業による大規模な基盤整備事業などはおこなわれなかったものの、藩領時代から継続して役所内に銀山方が置かれ、代官所の所在地であった高山の町人らによって多数の鉱山の開発が出願されるなど、鉱物資源開発の機運は決して低いとはいえないものであった。18 世紀後期は、農村部の居住者のうちにも遠隔地の鉱物資源開発に関与する者がみられるようになった。飛騨北部の吉城郡増谷銀山の再開発の事例では、飛騨南部地域の名主クラスの有力者によって 1 カ年程度の年季を限った開発が繰り返し出願され、7 年にわたって開発が進められた。この開発者は、同銀山の開発以前にも、高山の商人らとともに、大野郡横谷銅山の開発や鑄銭座の請負を出願するなど、鉱物資源開発に積極的に関与しようとしていた。商人や農村の有力者らが鉱物資源の開発者となり得たことについては、開発資本を供給できるだけの経済力を有していたこともあったが、飛騨地域やその周辺に鉱山の衰退後も鉱山集落が維持され、その居住者や流出した者によって伝統的な鉱業技術が保持されていたこと、開発者ら相互、銀山方の地役人らの中で情報が共有され、便宜が供与されていたことも、重要な背景であったと考えられる。

キーワード：鉱物資源、開発、飛騨地域、18 世紀

1. はじめに

本稿の目的は、幕府料であった 18 世紀の飛騨地域における鉱物資源開発がどのようにおこなわれたかについて検討することである。

鉱物資源開発に関する地理学研究においては、いわゆる鉱山集落の独特の景観や機能が主な関心の対象とされてきた[1]。鉱山業は激しい盛衰が特徴であり、その景観や地域特性は短期間に大きく変容した。技術の発達や社会、経済環境の変化を背景として、開発に関与する人びとの属性は多様化し、鉱物資源をめぐる地域間の関係も、時期によりさまざまに変転した。鉱物資源地域に関わる地域の特性は、このような変化の積み重ねの中で形成されたものであるといえる。盛期に注目するのみでなく、通時的な変化のなかで、鉱物資源に関わる地域の性格がどのように形成されたかについて検討することも、この分野の研究における重要な課題となるであろう。

16 世紀後半から 17 世紀初頭にかけて、日本各地において金銀鉱山が盛んに開発され、鉱物が大量に産出されたが、当時の技術で採掘可能であった鉱床が劣化したことや、地下深部にまで至った坑道が、湧出する地下水の下に没したことにより、17 世紀後半には、早くも衰退の途に就いた鉱山が続出した。その後、近代になって西欧の鉱業技術が導入されるまでのわが国の鉱山業は、鉱物の産出高からしても技術的な側面からしても、みるべきところのない、いわば衰退期であったと一般には位置付けられてきた[2]。

しかし、管見の限りでは、18 世紀半ば頃には、近世初頭に多くの鉱物資源を産出した鉱山の再開発に加え、従来開発の俎上に上らなかつたような小規模な鉱脈の開発もおこなわれるようになり、開発の件数は決して少なくはなく、鉱物資源開発の機運はむしろ高まっていたと思われる[3]。

さて、飛騨地域では、江戸初期における有力な銀山として知られていた吉城郡和佐保銀山（現飛騨市神岡町和佐保）や同郡茂住銀山（現飛騨市神岡町東茂住）を中心として、19 世紀半ば頃より鉱物資源の開発が活性化した。多数の零細規模の開発主体によって採掘がおこなわれるという開発の形態は、幕末期から明治 10 年代にかけての飛騨地域の鉱物資源開発における顕著な特徴であった。三井金属鉱業史委員会編(1970)、岐阜県編(1972)などでは、飛騨地域における鉱山業の展開について比較的詳細に記述されているが、そこでの関心の中心はやはり 19 世紀以降の盛期に置かれていた。それ以前の時期に関しては、金森氏の移封により飛騨地域が幕府領となった 17 世紀末以降、飛騨の鉱山業は著しく衰えていたことが指摘され、18 世紀にはいくつかの開発の試みがあったが、全体としては鉱物の産出はわずかなものに過ぎなかつたことが、史料に則して時系列的に記述されるに留まっている。

かつて筆者は、18 世紀の初頭から半ばまでの茂住銀山集落（飛騨市神岡町東茂住）の存続要因について検討した[4]。そこでは、鉱山業が衰退途上にあつた 17 世紀後半に、多くの者が近隣諸国の他鉱山や富山城下などへ退転して、戸口は 20 戸弱ほどにほぼ一定に保たれ、零細な鉛山稼行などに

¹⁾東京都立産業技術高等専門学校 ものづくり工学科、一般科目

よって鉱山集落が維持され、そこに鉱床に関する知識や鉱業技術が保持されていたことを指摘することができた。一方で、小葉田(1968)、小葉田(1986)や三井金属鉱業修史委員会編(1970)に述べられているように、この地域には、江戸初期に繁栄した鉱山が衰退した後、鉱山集落が廃絶したり、農村集落へとその性格を変えたりした例も少なくなかった。そのような鉱山の再開発がおこなわれた際には、開発の技術的側面は、残存した鉱山集落の住民やそこから流出した者らによって担われていたと考えられる。

また、開発資本についてみれば、19世紀の茂住銀山では、飛越を結ぶ流通に関わることで富を蓄えたと考えられる村内や隣村の富裕者による仕送りを通じて供給された例がみられた。和佐保銀山の再開発は、19世紀初め頃、越前国面谷銅山(現福井県大野市面谷)から来住した鉱山技術者によって始められたが、開発の出願や資本の供給については、大野郡大西村(現高山市久々野町大西)の富裕者と目される者らによって担われたのであった[5]。

既往の成果をふまえ、以下では18世紀の飛騨地域における鉱物資源開発はどのように進められたのかについて、これまで積極的に取り上げられなかったいくつかの史料も参照して、開発がどのような人びとによっておこなわれたのか、代官所は開発にどのように関与したか、といったことに注目しつつ、できるだけ具体的な様相を明らかにしたい。

2. 18世紀、飛騨国の鉱山開発を支えた人びと

18世紀初頭には日本国内の諸鉱山の荒廃はいよいよその極みに達していたが、同時にこの時期は、幕府や藩などの直営により、さまざまに鉱山の復興策が試みられた時期でもあった[6]。鉱山の復興のためには、大規模な排水坑道の掘削など、巨費を投じた基盤整備の事業が不可欠であったが、この時期の山師などにはその余力はなく、幕藩領主の手によってしか、それらはなし得なかったのである。

飛騨国においても、1586(天正14)年以来、高山を本拠とした金森家のもとで、17世紀初頭までに複数の金銀山が開発され、繁栄したが、いずれも17世紀末までには衰微していた。高山藩の統治機構には銀山方が設置されており、地役人による藩内鉱山の管理がおこなわれていた。1692(元禄5)年、金森家が出羽上山藩へ移封となった後、飛騨国が幕府直轄領となってからも銀山方は引き続き置かれたが、その規模は縮小された。また、初代飛騨代官伊奈伴十郎忠篤の方針では、名ばかりの金銀山は基本的に廃止することとされており、公費を投じた復興策が講じられるどころではなかった[7]。

さて、1767(明和4)年、高山代官所によって「金銀銅鉛山間歩箇所附帳」(以下では「箇所附帳」と略称する)が作成されている[8]。ここには金山が7カ所、銀山が6カ所、銅山が6カ所、鉛山が1カ所、計20カ所の鉱山が書き上げら

表1 18世紀における飛騨国内の主要鉱山の稼行状況

郡	村	字	鉱種	窓間歩数	稼間歩	概要
大野郡	池本・大谷村	字片野	金山	2	0	金森領の時代に稼行された古間歩。
大野郡	六廐村	字六廐谷	金山	2	0	1702(元禄15)～1712(正徳2)年、江戸伊勢屋清兵衛外4名が拝借金3000両を得て稼行するも鉱脈に当たらず休山。
大野郡	牛丸村	字上瀧	金山	1	0	同上
大野郡	森茂村	字小澤	金山	1	0	1708(宝永5)年、大野郡池本村彦右衛門請負。1719(享保4)年、大野郡片野村銀山師伊之助稼行するも鉱脈に当たらず休山。
吉城郡	天生	字天生山	金山	2	0	1702(元禄15)～1708(宝永5)年、高山町人打田屋三右衛門・嶋田新助稼行。産金あるも資力不足し休山。
吉城郡	森部村	字かぬ山	金山	2	0	1709(宝永6)年、吉城郡大沼村久左衛門・同郡折敷地村喜右衛門普請するも鉱脈に当たらず休山。
吉城郡	蔵柱村	字金山	金山	2	0	1706(宝永3)年、吉城郡在家村惣右衛門・大野郡高山町源右衛門・長右衛門稼行するも鉱脈に当たらず休山。
吉城郡	平湯	字かぬ山	銀山	2	0	1707(宝永4)年、大野郡高山町吉兵衛・新七稼行するも資力不足し休山。
吉城郡	和佐保銀山	字大学・嘉左衛門	銀山	2	0	1698(元禄11)年、江戸太田屋弥七・堺屋忠蔵・松本屋弥兵衛により稼行、産銀あるも資力不足し休山。1708(宝永5)年、地元山師稼行するも資力不足し休山。
吉城郡	和佐保銀山	字和佐保山	銀山	16	0	往古の古間歩。
吉城郡	茂住銀山	字増谷	銀山	2	0	1708(宝永5)年～1712(正徳2)年、江戸伊勢屋清兵衛外4名、六廐・上瀧金山より移って稼行。産銀あるも年季明けとなり休山。1719(享保4)～1721(享保6)年、地元山師稼行するも資力不足し休山。
吉城郡	茂住銀山	字茂住山	銀山	44	0	往古の古間歩。
吉城郡	茂住銀山	字天道平	銀山	9	0	1705(宝永2)年地元山師稼行し、産銀あるも翌年年季明けとなり休山。
大野郡	山之口村	字六郎谷	銅山	3	3	1764(明和元)年7月～翌年11月、高山町林屋兵右衛門により開掘。12月より運上請負山となり、当時稼行中。
益田郡	中洞村	字小杣小屋・金山	銅山	2	0	1751(宝暦元)～1756(宝暦6)年、大野郡高山町榎井屋利左衛門・林屋兵右衛門により開掘、産銅あるも年季明けとなり休山。
大野郡	三尾河村	字三谷	銅山	5	0	1697(元禄10)年、大野郡一色村甚助稼行するも銅出方少なく休山。1737(元文2)～1739(元文4)年、江戸長崎屋安九郎稼行するも銅出方少なく休山。
益田郡	尾崎村	字金山	銅山	1	0	1699(元禄12)年、益田郡萩原町甚七開掘するも鉱脈に当たらず休山。
吉城郡	茂住銀山	字池之山	銅山	2	0	往古の古間歩。
吉城郡	和佐保銀山	字和佐保山	銅山	3	0	1721(享保6)年、飛騨国銀山師久兵衛稼行して産銅あるも翌年鉱脈尽き休山。
吉城郡	茂住銀山	字池之山	鉛山	16	0	往古の古間歩。外より請負人は無く、地元山師により稼行されてきた。

(高山市飯島家文書、明和四年「飛州金銀銅鉄鉛山箇所附帳」より作成)

れ、間歩(坑)数は合計 119 に及んでいた(表 1)。もっとも、「箇所附帳」作成当時、稼行されていたのは、大野郡山之口村(現下呂市萩原町山之口)の六郎谷銅山のみであり、そのほかはすべて「留間歩」、すなわち休山して坑口が封印された状態であった。また、ほぼすべての鉱山について、「往古稼候古間歩」などと、以前に稼行された旨が記されている。

「箇所附帳」以前にも領内の鉱山の状況に関する書上が作成されているが、それらは代官の代替わりに際して巡見使に提出されたものであった[9]。そこに記載された鉱山のほとんどは「箇所附帳」と重複しているが、それらには、茂住銀山や和佐保銀山をはじめ、江戸初期までに繁栄した鉱山に形成されていた鉱山集落の戸口が減少していく様子も記されていた。

18 世紀初頭における開発としては、金銀山の再開発が多数を占めていた。鉱脈に至ることすらできなかった鉱山も少なくなかったが、天生金山(現飛騨市河合町天生)や和佐保銀山の大学舗や嘉左衛門舗では、鉱物の産出をみていた。それらですら、資力が不足したために休山を余儀なくされていた。開発のための十分な資本を確保することが、まず第一の課題であったことがわかる。この時期の開発に江戸の町人が比較的多く関わっていることには、地元の金山師の減少や飛騨国の幕府料化といったこともいづらか預かっていたであろうが、そのことが色濃く反映されていると考えられる。また、多くの事例において複数の者によって開発されていたことも、資本の確保やリスクの分散が考慮されたものと考えられる。

そうした中であって、江戸伊勢屋清兵衛・伊賀屋小八郎・河内屋五右衛門、飛騨国大野郡高山町(現高山市)紀伊国屋与左衛門、同国同郡牧戸村(現高山市荘川町牧戸)久右衛門による六厩金山(現高山市荘川町六厩)、上瀧金山(現高山市荘川町牛丸)の再開発では、幕府より開発者へ金 3,000 両が貸し付けられていたことが注目される。前述のように、この時期の飛騨国では、幕府直営による復興策はみられなかったが、このような措置により、民間による鉱山復興が促されたのであった。幕府としては、仮に開発が首尾良くいかなかったとしても、元本を回収できれば損失となることもなく、その点でも望ましい仕法であった[10]。

上瀧金山の再開発は、1702(元禄 15)年から 1712(正徳 2)年までおこなわれる予定であったが、成果をあげることができず、年季途中の 1708(宝永 5)年より、開発の対象は増谷銀山(飛騨市神岡町東茂住)へと変更された。増谷銀山では、鉱床への到達に成功し、1710 年に銀 7 貫 57 匁 8 分、翌 1711 年に銀 3 貫 228 匁が上納されたという。年季明けの 1712 年には 8 月までに掘り溜められた土荷物が 95 荷郷蔵に詰め置かれたのみで、間もなく鉱脈が尽きたと記録されている[11]。

18 世紀半ばに開発の対象とされたのは、益田郡中洞銅山(現高山市高根町中洞)や前出の山之口村六郎谷銅山など、銅山が多かった。諸国の幕府料、私領にあてて、1695 年以降、鉱山開発を奨励する触書が繰り返し出されているが、

他の年次のものでは、金銀銅鉄鉛山のいわゆる五金の開発が奨励されているのに対して、1763(宝暦 13)年 3 月に出された触書では、「諸国銅山、是迄相稼がざる場所ならびに前々出銅これ有り、当時休山に相成り候場所これ有るべく候間、御料は御代官、私領は領主・地頭より吟味を遂げ相稼ぎ、出銅これ有る様、取りはからうべく候、尤も出銅有無共吟味の趣、御勘定所へ書付差し出すべく候」と、特に銅山の開発が求められている[12]。1766(明和 3)年には銅座が再興されるなど、この時期には銅の増産がとりわけ必要とされていたとみられる。

岐阜県歴史資料館に所蔵されている高山陣屋文書の中に、1748(寛延元)年~1791(寛政 3)年の銀山方の日記がある(以下では「日記」と略称する)[13]。そこには、1750(寛延 3)年 4 月から 1756(宝暦 6)年 6 月にかけておこなわれた中洞銅山(現高山市高根町中洞)の開発に関する記述が頻出する。開発の期間は「箇所附帳」に記載されたところとほぼ一致している。このことは、両史料ともに代官所で作成された記録であることでもあり、当然のことのように思われるが、表 1 にみられる高山町の 2 名の出願者のうち、桜井屋利左衛門が病気のために辞退し、代わりに同じく高山町の増田屋理(利)助と交替していることが「日記」には記載されているが、「箇所附帳」には記されていない。また、片野金山(現高山市清見町大野・池本)について、「箇所附帳」には、金森氏時代に稼行された古間歩で当時は「留間歩」と記載されているのみであったが、「日記」には、1750 年 2 月、片野(元目)金山旧坑の取り明けを所望してきた者があり、銀山方地役人から山元の名主・組頭・山見の者に対し、案内等の対応が申し付けられたこと、翌 1751 年に堤屋吉三郎と笠井屋吉兵衛より 4 月から 6 月の 75 日間の間掘が、6 月~9 月の 100 日間の間掘の延長が出願され、下知されたこと、そして同年 10 月には普請が終了し、地役人が坑口の封印に赴いていることなどの記録がある[14]。これらの間掘期間中には 24 匁 4 分 5 厘と、わずかばかりではあるが産金があり、運上として金 1 分と永 212 文 5 分 1 厘 3 毛(總にして 954 文)が取り立てられたことも記載されている。

このほかにも、1749 年 5 月に高山町近藤屋新五郎によって見立てられ、翌 1750 年 4 月に同人より間掘が出願された白川郷中野村銅山(現高山市荘川町中野)、1750 年 5 月、八賀町方村(現高山市丹生川町町方)の伊兵衛による出願があった麻生野山檜谷の金山古間歩(現飛騨市神岡町麻生野)、同年 11 月に高山町近藤屋新五より出願のあった池ヶ洞村塩沢銅山(現高山市高根町池ヶ洞)、1760(宝暦 10)年 4 月に高山町の米田屋善助・近藤屋新五、林屋兵右衛門・益田郡名丸村(現下呂市馬瀬名丸)二村屋市郎右衛門による間掘の出願があった白川郷飯嶋村横谷銅山(現大野郡白川村飯島)など、「箇所附帳」にはその名がみられない鉱山が「日記」には記載されていた。それらについては、出願に関する記録以外に何も記されていないため、実際に開発にまで至っていなかったとも思われるが、1748(寛延元)年 7 月から 1750 年 5 月にかけて開発された四美村(現下呂市萩原町四美)一石谷銀銅山については、銀山方の地役人もしばしば出張

するなど「日記」に多くの記載があるにもかかわらず「箇所附帳」には記載されていない。片野金山でもそうであったように、十分な鉱物の産出がなかった開発については、「箇所附帳」には記載されなかったということかもしれないが、いずれにしても、「箇所附帳」を通じて知られるところ以上に、飛騨国では鉱山開発の機運が高まっていた様子を、「日記」からは知ることができる。

図1には、「箇所附帳」および銀山方「日記」に記載された主な鉱山の位置とその開発者の居住地を示した。ここで、「開発者」とする者の中には、開発の出願者のほか、金主や仕送り人なども含んでいる。国外の居住者は、いずれも江戸、大坂の町人であった。前述のように、18世紀初め頃の開発については、江戸の町人が加わっていた例が多い。ここで用いた史料から知られる限りでは、18世紀後半の開発における他地域の関与は、中洞銅山の産銅を買い入れていた大塚屋甚右衛門の1例があったのみである[15]。

高山町の居住者は、すべての時期を通じて、広域にわたって鉱山開発に関わっていたことが、一見してわかる[16]。

この図では、それぞれの鉱山の開発に関与した者の居住地が示されているのみで、関わった人数は反映されていないが、鉱山開発に関与した人数の多さでも、高山町は群を抜いていた。高山町は、金森氏の城下町として整備され、飛騨地域随一の都市的集落となっていた。幕府料編入以後も、代官所は高山町に置かれた。経済力に恵まれた者の数は、飛騨地域の中では圧倒的に多かった。藩庁や代官所の所在地であったために、江戸期においては、一般の人びとの生活における消費というよりは、主に領主的な用途に対応した生産物であるという側面が目立った鉱物資源の需要の高まりを敏感に感知し、開発に乗り出す動機を得やすい立場に、この地はあったといえる。中野村銅山・塩沢銅山・横谷銅山の出願に名を連ねた近藤屋新五郎や、中洞銅山・横谷銅山・山之口村銅山に次々と参画した林屋兵右衛門のように、鉱山業が本業であるかのように見える者もあった。

事案件数は多いとはいえなかったものの、農村集落の居住者の開発への関与が複数みられたことも注目に値する。たとえば、四美村銀銅山の開発に関わった萩原町(現下呂市

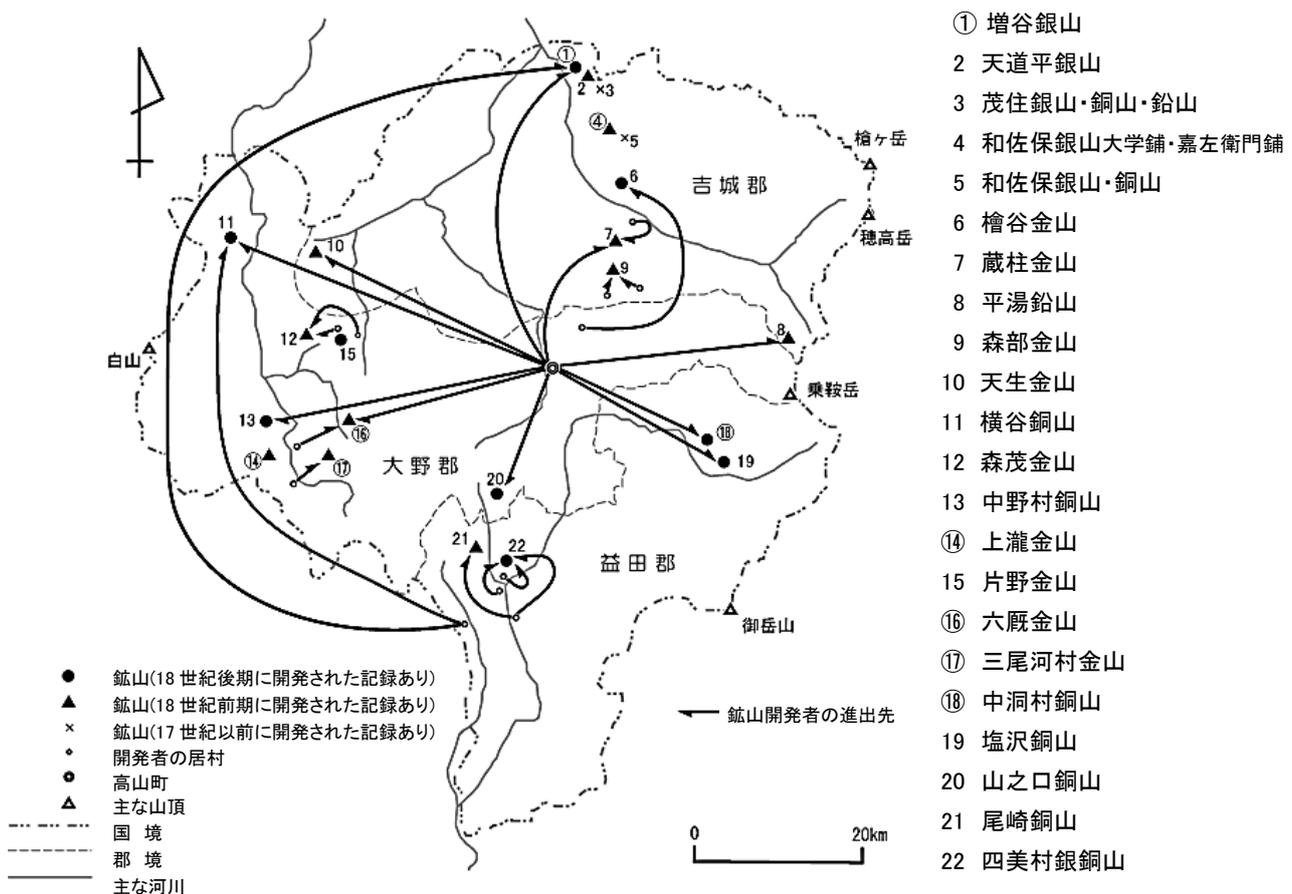


図1 18世紀における飛騨国の鉱山とその開発者の居住地

(高山市飯島家文書 明和四年「飛州金銀銅鉄鉛山箇所附帳」, 岐阜県立歴史資料館所蔵 「日記(銀山方)」各年次分により作成)

- 注 1) 特定の居住地における開発者の人数の多少は図には反映されていない。
2) 番号に○囲みのある鉱山は、飛騨国外の居住者(江戸、大坂など)による開発がおこなわれた事実があるものであることを示す。
3) 15 片野金山の開発者堤屋吉三郎・笠井屋吉兵衛の居住地は不明。
4) 郡境は江戸期のものを示している。

萩原町萩原)の庄右衛門、野上村(現下呂市萩原町野上)の与市、四美村(現下呂市萩原町四美)の品右衛門などは、いずれも銀山近隣の集落の居住者であったが、必ずしも鉱山技術者というわけではなかったようである。「日記」によれば、それに先立つ1748(寛延元)年7月、銀山方地役人を介して、四美村より数次にわたって「山色問吹土」が茂住銀山へ送られ、品位の判定がおこなわれている。庄右衛門らによって1749年3月に提出された願書には「掘大工、人足の外行衛知れざるもの、小屋に一夜の宿も仕らせ申すまじき旨、委細仰せ渡され畏み奉り候」とあり、金掘大工ほかは他所から雇い入れるつもりであったことがうかがわれる。

18世紀後期には、農村部の者のうちにも、居住地の近隣に留まらず、遠く隔たった鉱山の開発に関与する者がみられるようになった。檜谷金山の試掘を出願した八賀町方村伊兵衛や、横谷銅山の問掘出願に、高山町の米田屋善助・近藤屋新五、林屋兵右衛門とともに願人に名を連ねた益田郡名丸村の二村屋市郎右衛門などの例である。

このうち二村屋市郎右衛門の家は、同村の名主を代々勤めていたことが知られている。名丸村は飛騨川の支流、馬瀬川流域の狭小な低地にわずかに耕地が営まれる山間の集落である。この家に伝えられた史料について調査した田中晃(1953)によれば、高山や郡上郡の村落の者との間の金銭貸借に関わる史料が多数残されているが、生糸に関わるものが若干あるほかは、農業以外の生業に関する史料は乏しいとのことである[17]。しかし、鉱山開発に関わるだけの経済力を蓄えるのに、この村の農業的基盤はきわめて貧弱といわざるを得ない。やはり、何らかの非農業的な経済活動に関わっていたことが推測される。

二村屋の史料の内に、飛騨国内の18カ所の鉱山を普請するためとして市郎右衛門が金15,000両の拝借を出願したことを示す1767(明和4)年7月の史料がある[18]。そこにおいて、市郎右衛門は、金森氏の藩領時代には領内諸所で鉱山が稼行されていたが、幕府領となって以後、御材木元伐稼は従来と変わりなく仰せつけられているのに対して、鉱山稼ぎは長い間おこなわれず、よい鉱脈があるにも関わらず、開発を出願する者も無くなってしまった、と現状を憂慮し、「これにより当国にて右躰盛り山にも相成るべきと存じ奉り候場所々々を相糺し、当年迄拾ヶ年余相考え、此度前書の御前貸し願い奉り候」と、出願に至るまでに調査と10カ年余りわたって熟考を重ねたこと、自身や親類の所持する田畑を担保とすることを述べ、毎年金1,000両ずつ、15年にわたって貸し付けられるよう出願している。

三井金属鉱業修史委員会編(1975)においては、そもそもこの願書が実際に提出されたかについて疑念を添えて、少なくともこの出願が聞き届けられた形跡はないことが指摘されている[16]。貸付を出願した額がきわめて大きかったにも関わらず、具体的な事業の内容を欠いていること、宛先が「御奉行所様」とされているのみである点など、提出の事実を疑う余地はたしかに少なからずある。しかし、この願書が作成されたのは、代官所によって「箇所附帳」が作成された直後の時期にあたり、飛騨国内の鉱山18カ所のう

ち、金山7カ所、銀山4カ所、銅山5カ所、鉛山2カ所という内訳は、「箇所附帳」にとりあげられた鉱山の内訳(金山7カ所、銀山6カ所、銅山6カ所、鉛山1カ所)ときわめて似通っており、その記載内容が踏まえられているように思われる。

また、同家の史料中に、銀山方役人より和佐保山三郎兵衛・作兵衛へ宛てて吉城郡和佐保銀山の普請を申し付けた1671(寛文11)年9月付の書状がある[19]。田中(1953)によれば、市郎右衛門の家系に三郎兵衛や作兵衛にあたる人物はおらず、この史料がなぜ同家に伝わっているかは不明、とある。この史料は、見込みのある鉱山について調査をおこなう過程で、市郎右衛門の手に渡ったものではなかろうか。

「日記」には、横谷銅山開発の出願に先立つ1758(宝暦8)年5月、近藤屋善助、林屋兵右衛門と共に、市郎右衛門が飛騨国内の金銀銅鉛山の開発に加えて鑄銭座の請負を出願したことも記されている。市郎右衛門が長い期間にわたって、鉱山開発に大きな関心と意欲を抱いてきたことには間違いなさそうである。

3. 明和～安永期における増谷銀山開発の試み

1) 名丸村名主市郎右衛門の問掘出願と代官所の対応

市郎右衛門は、横谷銅山の出願からさらに7年後、吉城郡茂住銀山(現飛騨市神岡町東茂住)の一部であった増谷銀山の開発にも取り組んでいる。明和7(1770)年8月、飛騨代官大原彦四郎紹正より江戸の勘定所へ、飛騨国吉城郡茂住村銀山分字増谷における銀山問掘の許可の可否を伺った、以下のような書付が提出されている[20]。

【史料1】

覚

飛州吉城郡茂住村地内
字増谷

飛州益田郡名丸村
願人 市郎右衛門

一、銀山問歩壺ヶ所再問掘願

冥加銀三拾五匁

此金貳分、永八拾三文三分三厘三毛

但、金壺兩=付銀六拾匁替

右者私御代官所飛州吉城郡茂住村地所字増谷銀山再問掘之儀申渡候月より拾貳ヶ月之分御下知被仰渡、去丑八月申渡、当寅閏六月迄十二ヶ月=候処、先達而申上候通り堅石掘当り昼夜出精致切抜候得共、一躰岩山=而敷内延兼、右問掘中堅石掘抜不申候、然ル所先年紀伊国屋与左衛相稼候古問歩等取明、先年之堅石問敷見合候処、此上十二ヶ月問掘被仰付被下候ハ、堅石掘抜、赤物銀嚙之鏈=掘当可申奉存候間、再問掘拾貳ヶ月被仰付被下置候様相願候=付冥加銀

三井金属鉱業修史委員会編(1970)では、この図を宝永～正徳期の紀伊国屋与左衛門等による開発の様子が描かれたもので、1714(正徳4)年の作成であるとしているが[23]、以下にあげたような理由から、筆者はその作成時期は、おそらく1774(安永3)年頃まで下るであろうと考えている。

表現はきわめて簡略であるが、高山町と越中を結ぶ街道が2筋に分かれている辺りに複数の家形が描かれ、「銀山村」(図2中の③)とある。その川下(向かって左方)の方に柵と建物が描かれ、「下之口御番所」(図2中の①)と記されている。茂住銀山の盛期には、茂住村銀山分集落の両端には上ノ口、下ノ口の口留番所が設置されていたが、銀山の衰退により、享保期から延享期の間(1716～1748年頃)に上ノ口番所が廃止されて建物が取り除かれ、下ノ口番所も1791(寛政3)年に撤去されている[24]。この絵図が正徳年間について描かれたものであれば、上ノ口番所も描かれていなければならないはずである。

もっとも、高原川沿岸の段丘上に「宗貞屋舗跡」(図2中の②)が描かれており、1750(寛延3)年にこの場所に移転しているはずの金龍寺についての記載がないのは気にならないではない。このことは、あるいは、この絵図の作成時期に関する三井金属鉱業修史委員会編(1970)における推測に影響を与えたかもしれない。

これについては、江戸期に村内にあった教覚寺、浄慶寺といった他の寺院も描かれておらず、そもそも寺院はこの図においては表記の対象とされていないと考えられることができる。増谷銀山の開発について描かれたこの絵図の本来の目的からすれば、飛騨国内の鉱山開発における伝説的な存在であった茂住宗貞の古跡に関する情報を示すことは重要であると考えられたものではなかろうか。

地中の表現についてみると、「紀伊国屋与左衛門古間歩」(図3中の⑩)という記載があり、坑口から向かって左方へ坑内部が描かれている(図3)。同時代の開発について、通常、「古間歩」という表現が用いられることはまずないと思われる。この坑の最奥部には「見込銀落之所」があるが、水で埋まっており、「古間歩」から「銀落」に到達できないことが表現されている。間歩口に近いところにも、小規模な「銀落」が水埋まりとなっている表現があり、「此所紀伊国屋与左衛門灰吹銀七拾貫目程掘出候前銀落」と記した貼り紙が付されている(図3中の⑪)。「紀伊国屋与左衛門古間歩」に関する「是迄百式拾間取り明け候」という貼り紙の注記(図3中の⑫)は、史料1における「紀伊国屋与左衛門の古間歩を取り明け、先年の堅石間数見合わせ候所」という記述が示すところと符合する。

絵図中の注記のうち、もっとも古い年は「子年」、新しい年は、「午八月」である。開発初年度の1708(宝永5)年は子年であるが、これを図の注記に当てはめれば、順次「丑年」は1709年、「寅年」は1710年、そして「午年」は1714年となる。これは1713年に間歩が封印された、という事実と矛盾することになる。

その後、増谷銀山では茂住銀山村の金山師による普請がおこなわれているが、これは1719(享保4)年～1721年の約3



図2 「飛州古城郡増谷銀山絵図」(部分)
(飛騨市神岡町東茂住金龍寺所蔵東茂住土地共有会文書)
①「下之口御番所」 ②「宗貞屋舗跡」 ③「銀山村」

カ年で終わっており、やはり当てはまらない。史料1の記載内容と照らしてみても、この絵図は、名丸村市郎右衛門による普請について書かれたものとするのが、もっとも妥当性が高いであろうと思われる。

この絵図が市郎右衛門による増谷銀山再開発を表現したものであるとすれば、その普請は以下のように進行したことになる。まず、「子年」、すなわち1768(明和5)年、もっとも麓に近いところに「一番間歩」が、「巳午」すなわち南南西へ向けて開掘された。翌1769年、一番間歩の上方に「二番煙廻」が開かれた。史料1が提出された1770年8月の時点では、これらの間歩が普請中であったことになるが、「一番間歩」には、「掘詰迄百四拾間、子年より辰年迄五ヶ年稼、当時相稼ぎ申さず候」(図3中の①)、「二番煙廻」には「丑年より辰年迄四ヶ年間に間数百五拾八間、当時相稼ぎ申さず候」(図3中の②)と注記がある。このように、間掘の出願が繰り返され、1772(明和9;安永元)年までさらに2年ほど普請が継続された末に、漸く普請に終止符が打たれた。「此所まで折々堅石に掘り当り、手間取り候所、漸く相稼ぎ是まで掘り候所、至って堅石ゆえ、もはや相延べ難く、此両間歩相止め申候」(図3中の⑩)と、結局、堅石を掘り抜くことができなかったと語る注記が付されている。

ところが、市郎右衛門は再開発をまだ諦めてはいなかった。絵図には「三番水抜」が描かれ、「辰年」、すなわち1772年に普請が始められたとある(図3中の③)。この間歩は「巳」、すなわち南西へと、それまでとはやや異なった方角へ向けて新たに掘り始められたものであった。1774年と推測される「午年」8月の時点までに、四ツ留口より140間掘り進まれ、なお普請中であった(図3中の④)。

ここにみたように、市郎右衛門の増谷銀山の間掘においては、紀伊国屋与左衛門古間歩の取り明けを含めても、同時に普請が進められたのは1～3坑であった。「日記」に、中洞村銅山の間掘をおこなっていた増田屋理助、林屋兵右

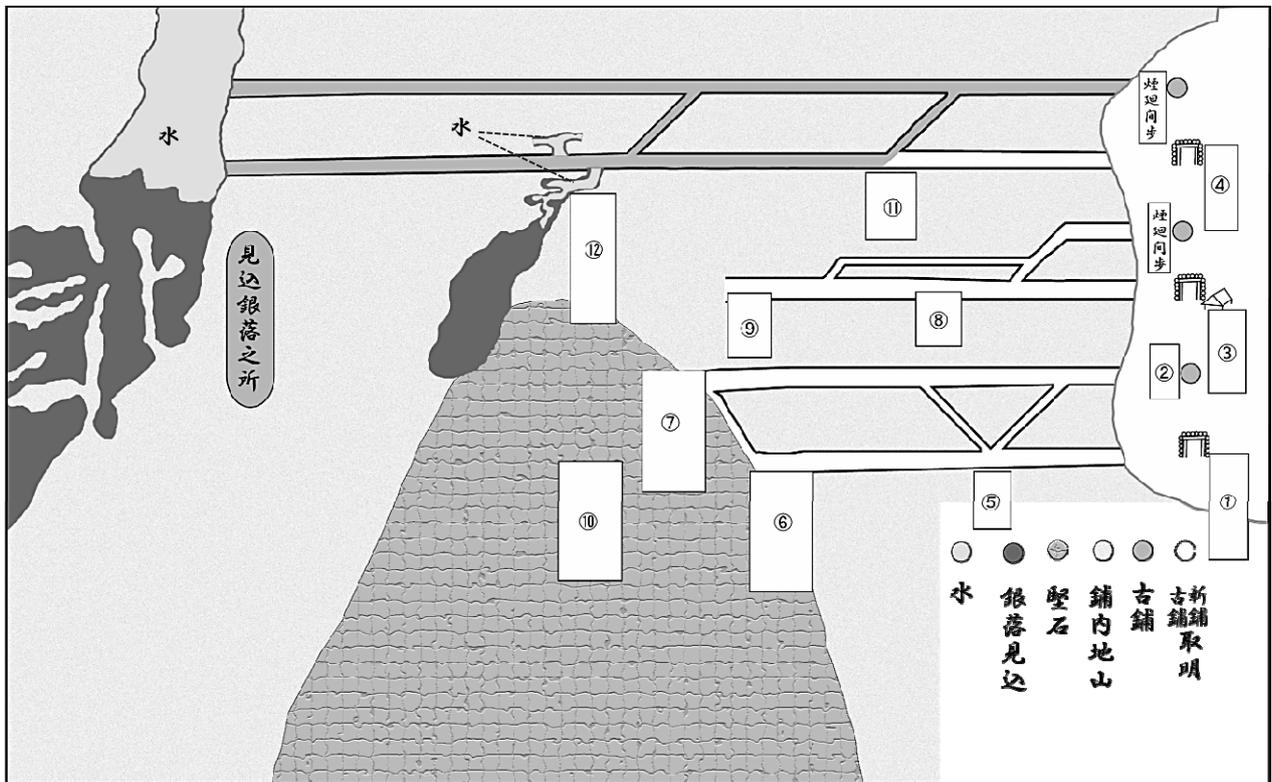
衛門によって 1751(寛延 4)年 5 月に銀山方へ提出された報告書の内容が収められており、それによれば、当時、増田屋によって普請されていた間歩が 3 カ所、林屋によるものが 4 カ所あり、そこでの稼行の様子について、「問掘の儀に候えば、漸く大工・掘子四、五人入れ申し候て、出高積もりの儀、只今は申し上げ難く、その上吹屋大工も相雇い申さず候故、銅鉞位の儀も相知れ申さず候…」と記されている。増谷銀山の問掘の様子も、これとさほど異なるものではなかったと推測される。

茂住村には鉞山集落が残存しており、鉛山稼行などで生計をたてていた者が居住していたから、おそらくは市郎右衛門による問掘にあたっては、茂住銀山集落の者が雇用されていたと思われるが、そのことについて語る史料などは、現在のところ確認されていない。また、絵図に記された「午八月」以降、さらなる普請が出願されたという史料は、現在のところ確認されていなければ、銀鉞石の産出に成功して、本格的な稼行が出願されたことを示す史料も遺されて

いない。

この事例もまた、成果をみるできないまま終わった開発の一例に属するものであり、それゆえに「箇所附帳」にも記載されていなかったものであろうと考えられる。甚だ残念なことに、「日記」についても、この一連の普請がおこなわれた期間を含む 1762(宝暦 12)年～1777(安永 6)年にかけての簿冊が欠落している。市郎右衛門の再問掘出願を伝える代官の伺書と増谷銀山の普請について描いた絵図を結びつけることができなければ、その開発の事実があったことすら忘れ去られていたであろう。

成果には結びつかなかったとはいえ、その出願に先立つ 10 年に及ぶ試行錯誤と 7 年にもわたって試みられた増谷銀山の再開の展開の跡をたどってみると、飛騨地域の鉞物資源開発の復興にかける名丸村市郎右衛門の熱意の程が知られる。それに対する代官大原紹正の対応はかなり好意的なものであった。飛騨地域の鉞山の再開に代官所の大きな期待が寄せられていたことをうかがい知ることができる。



- ① 一番間歩 巳午へ向
掘詰迄百四拾間、子年より辰年迄五ヶ年稼、当時相稼不申候
- ② 二番煙廻 巳午へ向
丑年より辰年迄四ヶ年二間
数
百五拾八間、当時相稼不申候
- ③ 三番水抜 巳へ向
辰年より当年八月迄間數
百四拾間掘入申候
- ④ 紀伊國屋与左衛門
古間歩
- ⑤ 煙抜拾間宛
- ⑥ 四ツ留より百四拾間
此所堅石ニ当り、間歩數
一円相延不申、当時
相稼不申候
- ⑦ 四ツ留より百五拾八間
此所堅石ニ当り、間歩數
一円相延不申、当時相稼
不申候
- ⑧ 四ツ留よりは迄八拾間
是より本楯鉞筋
卯ノ方へ向
- ⑨ 四ツ留より百四拾間
当年八月迄二相延
当時相稼申候
- ⑩ 此所迄折々堅石ニ掘当り
手間取候所漸相凌、是迄
掘候所、至而堅石故最早
難相延、此両間歩相止申候
- ⑪ 紀伊國屋与左衛門
古間歩、是迄
百式拾間取明申候
- ⑫ 此所紀伊國屋与左衛門
灰吹銀七拾貫目程
掘出候前銀落

図3 「増谷銀山絵図」にみる再開の進行

(飛騨市神岡町東茂住金龍寺所蔵東茂住土地共有会文書「飛州古城郡増谷銀山絵図」より作成)

4. むすびにかえて

最後に、本稿における検討を通じて明らかにできたことをまとめ、その意義と今後の課題を示しておこう。

鉱物資源の産出高については見るべきものはなかったために、あまり注目されてこなかった18世紀の飛騨地域の鉱物資源開発であったが、江戸初期までに繁栄していた金銀山の再開発を中心として、多くの開発が試みられるなど、開発の機運は決して失われたわけではなかった。17世紀末に折しも幕府料に編入されたばかりの飛騨国では、幕府直轄による基盤整備事業などは実施されなかったものの、有望そうな開発に対しては資金が貸し付けられるなど、幕府自身のリスクは回避しつつ、開発者への便宜がはかられていた。そうした機運に乗じたものか、18世紀前期には、江戸町人による開発への参画も多く見受けられた。

18世紀を通じて、飛騨地域の鉱物資源開発に重要な役割を果たしたのは高山町の居住者であった。彼らは飛騨地域の広範にわたる地域の鉱山開発に関与した。金森藩領時代、幕府料時代を通じて、地域支配の中心であったことから、この町の商人らは、大きな経済力を有するようになったとともに、鉱物資源開発の機運の高まりに敏感に対応することができた。飛騨地域において鉱山開発の一大盛期を迎えた19世紀半ばには、他地域の鉱山集落から移住して高山町に居住していた鉱山技術者が、和佐保などで実質的な鉱山経営者となっていた例も確認されているが[25]、或いはすでに18世紀中にそのような例もあったかもしれない。

一方で、18世紀後半になると、農村地域においても、鉱山開発に積極的に関与しようとする者が現れた。益田郡名丸村の二村屋市郎右衛門による増谷銀山の再開発は、まさにそのような開発の代表的な事例であった。市郎右衛門は、増谷銀山の再開発を出願する以前にも、高山の町人らとともに飛騨地域の鉱物資源開発を出願し、鑄銭座の請負を出願するなど、鉱物資源の開発に並々ならぬ熱意を示してきた。増谷銀山の開発は成功とはいえなかったと思われるが、問掘の出願を繰り返しつつ、7年の長期にわたって開発を継続した。もっとも、一向に成果があがらぬまま、長期間にわたって問掘が繰り返し下知されたことは、開発主体の熱意のみでは説明できない。そこには、代官所側の開発への理解と奨励の意思が反映されていたとみるべきであろう。

1765(明和2)年に飛騨代官として赴任した大原彦四郎は、安永期の検地による年貢の増収などによって郡代に昇進したが、一般に、その時代は後を継いだ子息の正純の時代とともに苛政のおこなわれた時期と捉えられることが多い。だが、その任期における鉱物資源開発に関する施策については、市郎右衛門の一連の開発に際しての対応にみられたように積極的な姿勢がきわだっていた。本稿で用いた「箇所附帳」にしても、従来は領内の鉱山の開発の経緯と現況に関する書上が代官の交替時の報告としておこなわれたのみであったものが、大原の任期の最中に作成されたものであった。それが、個人の資質によるものなのか、時代性を反映しているのかについて、判断するに十分な材料が得ら

れているわけではないが、他の産業の展開も含めて、再検討する余地があると思われる。

19世紀の飛騨地域では、有力鉱山の御手山、すなわち直営が試みられるなどの試行錯誤を経て、同世紀の半ば頃には、高山の町人の請負によって銀絞吹所が設置され、領内の鉱産物の安定した買入先となった。これにより、領内外の鉱山集落出身の金山師や在郷町の新興商人などから成る零細な稼行者が多数出現して、伝統的な鉱業技術の限界に加えて内政の混乱もあって日本国内諸地域の鉱山の多くが不振にあえぐ中、和佐保村の銅鉛山をはじめとする飛騨地域の鉱山業は一大盛期を現出するに至った。

ここにみられた二村屋市郎右衛門や高山の商人らは、18世紀半ばの飛騨鉱山業を支えるとともに、次代の繁栄へとつながる先駆となる存在であったと考えられる。彼らの活動を可能にした背景として、かつて筆者が検討した茂住銀山や和佐保銀山の事例にみられたように、飛騨地域やその周辺諸国に、鉱山の衰退後も鉱山集落が維持され、その住民であった鉱山技術者らによって伝統的な鉱業技術が保持されていたことが重要であっただろう。さらに、開発者ら相互、銀山方の地役人との間の情報の共有や代官所による便宜の供与も重要な背景であったと考えられる。そうした彼らの姿は、幕末期における盛期の直前、19世紀前期における和佐保村の銅鉛山開発に関与した船津町村(現飛騨市神岡町船津)の商人らと重なる面が多かったように思える[26]。その共通性や相違する点について、さらに19世紀半ばの盛期にあつて彼らのその鉱物資源開発への関与のあり方、捉え方はどのように変化したのか、といったことについても、さらに丹念に検討する必要がある。

また、筆者は以前、東北地方や中四国地方などにおけるこの時期の鉱物資源開発には大坂の銅吹商が主体となったものが少なくなかったのに対して、飛騨地域をはじめ日本中央部には、そのような例が比較的少なかったことを指摘したが[25]、このことには、飛騨地域には、高山の町人や市郎右衛門のような存在が多数あったことが関連しているように思われる。鉱山開発に関与するに足るほどの経済力はどのように維持されていたかも含め、それら鉱物資源の開発主体の具体像について明らかにすることも今後の課題である。

注

- [1] 川崎茂(1973)。
- [2] 日本学士院編(1982)。
- [3] 原田(1999)。
- [4] 原田(2009)。
- [5] 茂住銀山の事例については、原田(2009) : pp. 87-89、和佐保の事例については、原田(2002) : p. 47を参照。
- [6] 原田(2011) : pp. 25-26。
- [7] 三井金属鉱業修史委員会編(1970) : pp. 62-63。
- [8] 高山市一之町飯島家文書、「金銀銅鉛山問歩箇所附帳」(「金銀銅鉛山一件古書物写」所収)。

- [9] 高山市一之町飯島家文書，①「正徳式辰年秋御巡見様江書上ヶ之趣之写」，②「享保六丑三月，同九辰，亀田様書添，飛州金銀銅鉛山拾式ヶ所覚」（いずれも「金銀銅鉛山一件古書物写」所収）。
- [10] 石見銀山においても，18世紀初頭には，水抜間歩の掘削の資銀が幕府より貸し付けられている。貸付先は，当初は山師に対して直接おこなわれていたが，それでは返済がおぼつかないとされ，三都の商人に貸付がおこなわれ，その利銀が鉱山稼行に用いられるようになった。さらに後には，石見銀山料の住民への貸付銀の利銀をもって，鉱山稼行に充てられるようになっていく。
- 原田(2011)：pp. 197-198 参照。
- [11] 前掲[9] ①。
- [12] 国立国会図書館蔵「御触書天明集成」，宝暦13年3月条。
- [13] 岐阜県歴史資料館蔵，飛騨郡代高山陣屋文書 1.01-52 寛延元年～宝暦10年「日記(銀山方)」，1.01-53 宝暦10年～宝暦11年「辰巳日記(宗門并金銀山掛り御役所)」，1.01-54 安永7年～安永8年「戌亥日記(銀山方)」，1.01-55 天明4年～天明5年「辰巳日記(銀山方)」，1.01-56 天明7年「未日記(銀山方)」，1.01-57 寛政2年「戌日記(銀山方)」，1.01-58 寛政3年「亥日記(銀山方)」。現存するこれらの日記のうち，宝暦10年～11年以降のものは分量が少なく，記述内容も簡略なものとなっている。寛延元年～宝暦10年の簿冊については岐阜県編(1969)に鉱業に関する箇所の翻刻が収載されている。また，前田保治(1969)は全冊にわたって鉱山業に関連する記事を翻刻し，解説を加えている。
- [14] 「問掘」とは，江戸期における鉱山開発の形態の一種で，鉱脈の良否の評価が定まらない鉱山の普請を，「冥加」として金銀を上納した上で，期間を限って認められるものである。小葉田淳(1986)：p. 155 参照。
- [15] 三井金属鉱業修史委員会編(1970)：p. 74。
- [16] 江戸期の高山は，一之町村，二之町村，三之町村などから成り立っていたが，「箇所附帳」などの史料にも「高山町」として記載されていることもあり，ここでは，「高山町」とのみ記述することとする。
- [17] 益田郡馬瀬村(現下呂市馬瀬)二村家文書，「乍恐奉願上候御事」，岐阜県編(1969)：pp. 767-768 所収。
- [18] 三井金属鉱業修史委員会編(1970)：pp. 77-78。
- [19] 益田郡馬瀬村二村家文書，「覚」，岐阜県編(1969)：pp. 729-7730 所収。
- [20] 岐阜県歴史資料館蔵，飛騨郡代高山陣屋文書 1.00-10-12，「飛州吉城郡茂住村字増谷銀山再間堀伺書」（「見合諸御証文類」所収）。
- なお，「見合諸御証文類」には，このほかにも，武州横見郡荒子村(現埼玉県比企郡吉見町)の七郎右衛門から出願のあった益田郡跡津村(現下呂市萩原町跡津)字古跡における鉛山問掘に関する1766(明和8)年3月，7月の伺書も収められている。この問掘についてはほかに関連史料がなく，実施されたかどうか不明である。

- [21] 高山市一之町飯島家文書，「享保六丑年三月 同九辰 飛州金銀銅鉛山拾式ヶ所覚(写)」（「金銀銅鉛山一件古書物写」所収）。
- [22] 飛騨市神岡町東茂住金龍寺所蔵東茂住土地共有会文書，「飛州吉城郡増谷銀山絵図」。
- [23] 三井金属鉱業修史委員会編(1970)：pp. 92-93。この絵図は神岡町編(1975)の口絵でも紹介されているが，そこでは，その作成年代について，貞享～元禄期とさらに遡って推定されている。
- [24] 岐阜県歴史資料館蔵，飛騨郡代高山陣屋文書，「飛州村々引口番所御私下伺書」。
- [25] 小葉田淳(1986)：p. 161，原田(2002)：p. 51 に，諸国を渡り歩く鉱山技術者で，高山に居を構えた者があったことが事例をあげて紹介されている。
- [26] 原田(2011)：pp. 26-30。

主要参考文献

- 神岡町編(1975)：『神岡町史 史料編 中巻(鉱山関係史料)』神岡町。
- 川崎茂(1973)：『日本の鉱山集落』大明堂。
- 岐阜県編(1969)：『岐阜県史 資料編 近世6』。
- 岐阜県編(1972)：『岐阜県史 通史編 近世下』。
- 小葉田淳(1968)：『日本鉱山史の研究』岩波書店。
- 小葉田淳(1986)：『続日本鉱山史の研究』岩波書店。
- 田中晃(1953)：市良右衛門の家，岐阜史学，8，pp. 7-11。
- 日本学士院編(1982)：『明治前日本鉱業技術発達史』臨川書店。
- 原田洋一郎(1999)：江戸後期～明治初期における日本の非鉄金属鉱山，東京都立航空工業高専研究紀要，36，pp. 149-156。
- 原田洋一郎(2002)：江戸末期，神岡鉱山栃洞地区における鉱山開発の地域的基盤，地理学評論，75-1，pp. 41-65。
- 原田洋一郎(2009)：江戸中後期における鉱山集落の存続に関する一考察—飛騨国茂住銀山集落を事例として—，東京都立産業技術高専研究紀要，3，pp. 79-92。
- 原田洋一郎(2011)：『近世日本における鉱物資源開発の展開—その地域的背景—』古今書院。
- 前田保治(1969)：飛騨代官所「銀山方日記」：『三井金属修史論叢』，3，pp. 201-248。
- 三井金属鉱業修史委員会編(1970)：『神岡鉱山史』三井金属工業株式会社。
- 三井金属鉱業修史委員会編(1975)：『神岡鉱山史写真史』三井金属鉱業株式会社。